

スミス利潤概念の生成

著者	榎並 洋介
雑誌名	星薬科大学紀要
号	23
ページ	95-107
発行年	1981
URL	http://id.nii.ac.jp/1240/00000042/

スミス利潤概念の生成

榎 並 洋 介

Adam Smith on the Formation of Profit

YOSUKE ENAMI

〔 I 〕

アダム・スミスから利潤に関する明確な定義を見出すことはむづかしいというのが、今日までの一般的解釈である。事実、スミスの主著『諸国民の富』のなかには、利潤の量や利潤率に関する論述を読みとることができるけれども、利潤の定義らしきものと見つけ出すことは困難である。例えば「利潤がひきだされる資本」とか、「資財の利潤」とか、「利潤は使用される資財の価値によって全面的に規制」される、などの表現が随所に見られるのであるが、このことは、少なくとも、スミスが利潤を資財や資本と関連づけて理解していたことを示すものであるといえる。

こうした資本に対する利潤という捉え方の背景には、資本制社会の階級性を基軸とした全体社会の認識があった。スミスは、例えば次のようにいう。「あらゆる国の土地と労働の年々の全生産物、またはこれと同じことになるが、この年々の生産物の全価格は、……自然に土地の地代と、労働の賃銀と、資財の利潤との三部分に分割され、人民の三つの異なる階級、つまり地代で生活する人々と、賃銀で生活する人々と利潤で生活する人々との収入を構成している。これらは、あらゆる文明社会の三つの大きな、本源的な構成要素をなす階級なのであって、他のあらゆる階級の収入は、究

極的にはこれらの三つの階級のそれからひきだされるのである。」¹⁾ 資本に対する利潤を階級所得として位置づけていることは、注目に値する。これは、スミスの先行者たちが、利潤を安く買って高く売ることによって生ずる利得として把握していたことを考えあわせると、画期的なことであった。資本所有者は、資財を運営し、使用するさいの監督労働に対する報酬を手に入れることが目的なのではない。投下した資本に対して生まれてくる利潤を獲得することが究極の目的なのである。では、それは本源的にはどこから生まれてくるのであろうか。スミスによれば、「職人たちが原料に付加する価値は、……二つの部分に分解されるのであって、その一つはかれらの賃銀を支払い、他は、雇主が前払いした原料と賃銀との全資財に対する利潤を支払う」ということである²⁾。利潤というものは、資本の下に雇用された賃労働者が原料等の価値につけ加える価値から生まれる。この把握の仕方は、利潤の源泉を、本源的には、賃銀労働者の労働に求めていることになる。

- 1) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. by R. H. Campbell and A. S. Skinner, 2 vols, Oxford, 1976. I. xi. p. 7, p. 265. 以下 *Wealth of Nations* と称す。大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』2巻本（岩波書店）I, 432ページ。
- 2) *ibid.*, I. vi. 8, p. 67, 訳I, 132ページ。

この小稿は、このような利潤に対する概念が、スミスの論述において、どのような過程をへて、生成されてくるのかをみていく。そうすることによって、利潤の獲得を中心として形成される初期の資本制社会の本質を捉えることを目的とする。

〔 II 〕

スミスは、分業が確立すると人々は労働の生産物を相互に交換し、あらゆる人々は、ある程度、商人となり、社会そのものが一つの商業社会に成長すると述べている³⁾。すなわち、人間が自分自身の欲望の大部分を充足するためには、交換を通してしか方法は見出せない。どの部分とどの部分を交換するかといえば、自分自身の労働の生産物の余剰部分のなかで自分自身の消費を超えて、なお余りのものを他の人々の労働の生産物のなかで、自分が必要とするような部分と交換するのである。ところが、分業が発達してくると一定の商品どうしの物々交換は、不便になり、お互に商人になることもできなくなってしまう。このような事態を避けるために、商品生産社会においては、自分自身の労働の生産物のほかに、たいていの人々がそれらの生産物との交換を拒むまいと考えられているような一商品の一定量を、いつでも自分の手もとにもっているようなしかたで、交換を継続してきた。この共通の交換用具が貨幣なのである。貨幣がすべての文明国民の商業の普遍的用具になることによって、すべての種類の財貨の売買および交換が媒介され、一つの商業社会が成り立っているのである。

このような社会では、交換するにさいして人々が守るべき法則とは何んであろうか。スミスの関心は、財貨と財貨とを交換するばあい、あるいは財貨と貨幣とを交換するばあいの相対価値にむけられている。スミスは、財貨の相対価値を交換価値とよび、これを他の財貨に対する購買力として理解する。そうして、諸商品の交換価値を規定する実質的な尺度とはどのようなものであるのか、

すべての商品の実質価格とはどのようなものなのか、ということを知明していく。それは、『諸国民の富』第1編第6章において説明するわけであるが、スミスは、これに先立って、第5章において価値尺度に関する考察をおこなう。第5章の主題は「諸商品の 実質価格 および 名目価格について、すなわち、それらの労働価格および貨幣価格について」となっているが、主要な関心は労働価格と貨幣価格との区別である。

「あらゆる人は、その人が人間生活の必需品・便益品および娯楽品などをどの程度に享受できるかに応じて、富んでいたり、まずしかったりするのである。ところで、いったん分業が徹底しておこなわれると、1人の人間が自分自身の労働で充足しうるのは、これらのうちのごく小さな部分にすぎない。かれはその圧倒的大部分を他の人々の労働からひきださなければならないのであって、かれは、自分が支配しうる労働の量、つまり自分が購買できる労働の量に応じて、富んでいたり、まずしかったりせざるをえない。したがって、ある商品の価値は、それを所有してはいても自分自身で使用または消費しようとは思わず、それを他の諸商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品がその人に購買または支配させうる労働の量に等しい。それゆえ、労働はいっさいの商品の交換価値の実質的尺度なのである。」⁴⁾

この要旨は、こうである。分業が発達している社会においては、「自分が支配しうる労働の量、つまり自分が購買できる労働の量に応じて」、その人の富裕の程度がきまる。なぜならば、その人が生活するうえで必要な必需品・便益品・娯楽品の圧倒的大部分は、他の人々の労働に俟つかからである。したがって、ある商品の価値は、それを他の諸商品と交換しようと思っている人には、その商品がその人に購買または支配させうる労働の量に等しいのであり、それゆえに、労働はいっさいの商品の交換価値の実質的尺度である、ということである。商品の価値は、その支配労働量に等し

3) *ibid.*, I. iv. 1, p. 37, 訳 I, 93ページ。

4) *ibid.*, I. v. 1, p. 47, 訳 I, 105ページ。

いという、いわゆる「支配労働」価値説をスミスは唱えていることになる。

さらに、つづけてスミスは次のようにいう。「あらゆるものの実質価格は、つまりあらゆるものがそれを獲得しようと欲する人に現実についやさせるものは、それを獲得するための労苦や煩勞 toil and trouble である。それを獲得して売りさばいたり、他のものと交換したりしようと欲する人にとって、あらゆるものが現実にとどれほどの値いがあるかといえ、それはこのものがその人自身に節約させうる労苦や煩勞であり、またこのものが他の人々に課しうる労苦や煩勞である。……貨幣または財貨は、事実上、この労苦をわれわれからはぶいてくれる。これらの貨幣または財貨は、労働の一定量の価値をふくんでおり、われわれはそのとき、それらをこれと等しい労働量の価値をふくむと考えられるものと交換するのである。労働こそは、最初の価格、つまりいっさいのものに支払われた本源的な購買貨幣であった。世界のいっさいの富が最初に購買されたのは、金または銀によってではなく、労働によってであって、富を所有している人々、またそれをある新しい生産物と交換しようとする人々にとってのその価値は、それがそういう人々に購買または支配させうる労働の量に正確に等しいのである」⁵⁾。

このパラグラフは、労働は価値の源泉であることが明晰に述べられている部分である。スミスにとって、商品の実質価格は一つの商品を生産し、獲得するために必要な労働量のことである。重商主義的な富とは異なり、われわれが生活の必需品、便益品および娯楽品などの富を所有しているということは、それだけ自分で苦勞して働くことをまぬがれることを意味するし、また、それと同量の労働を含んでいる他の労働生産物を支配し購買することを可能にすることを意味するのである⁶⁾。スミスはいつている。あらゆる商品の実質

価格、つまり商品の有する価値は、それを所有することによって節約される「労苦や煩勞 toil and trouble」に等しいと。

この「労苦や煩勞 toil and trouble」という語は、三重に使われている。すなわち、いまから生産するのに必要な投下労働という意味。次には、免省労働といって生産物の所有者が欲するものを手に入れるのにその労働を省いてくれるという意味での労働。さらに、この免省労働は、反対の作用として、他の人々に課しうる賦課労働という意味での労苦や煩勞をあらわす⁷⁾。労苦と煩勞がこのような三重の意味をもっているとしても、あらゆる物の真実価格は、それを生産するために投下された労働量によってきまると解釈できよう。

このことを礎石にしながら、スミスは次のように展開しているのである。分業を基本とした商業社会では、この労苦を省いてくれるのは貨幣である。労働の一定量の価値を含んでいる貨幣は、これと等しい労働量の価値を含むものと交換する。だから、労働こそが、最初の価格であり、すべての物にたいして払われるところの本源的な購買貨幣であった。世界の富は、金・銀によってではなく、この労働によって購買されたのである。一つの財貨は、労働の所産であるから、それを他の財貨と交換するばあいには、他の財貨のなかに含まれているそれと同量の労働を購入しまたは支配できる、このようにスミスは述べているのである。つまり、ここでスミスは、「一つの財貨が労働の所産であること、したがって、そのことに基づいて、他の財貨のなかに含まれているそれと同量の

7) E. Cannan, *A. Review of Economic Theory*, London, 1929, p. 165.

Ronald L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, London, 1973, pp. 67~68. footnote 参照。水田・宮本訳、労働価値論史研究、日本評論新社、昭和32年、65ページ。なお、ここでいわれている三つの労働は個人的労働ではなくて、社会的平均的労働として理解されなくては量的には一致しない(平瀬己之吉、経済学の古典と近代、時潮社、昭和32年、122~123ページ参照)。

5) *ibid.*, I. v. 2, pp. 47~48, 訳 I, 105~106ページ。

6) 高島善哉、アダム・スミスの市民社会体系、岩波書店、昭和49年、145ページ参照。

労働を購入しまたは支配できる」⁸⁾と捉えているわけである。

ただ、このパラグラフに関する解釈は、未だに、明確になっているわけではない。ごく最近の見解のなかにも、次のようなものがある。スミスが述べているあらゆるものの実質価格は、……それを獲得するための労苦や煩勞 *toil and trouble* であるという主張をもって、スミスが、商品価値はその生産に投下された労働量によって決定される、と判断しているように解釈されてきたが、これは誤りである。スミスがここで主張しているのは、そういうことではない。「商品の所有者は、市場でその商品と交換に労働という商品を購入することができるのだから、その商品はその所有者に、労働者を一定時間にわたって労働に従事させる力を与えていることになるのだから、その商品の真実の価値の大きさは、その商品を賃銀として受取る代りに労働者が受取ることを余儀なくされる労苦や手数(煩勞—引用者)の分量に、つまり、賃銀労働者が一定時間労働に従事することによって犠牲にする安楽、自由および幸福の分量に等しいというのである。……だからこそ、スミスはこのパラグラフの末尾でも商品の価値はその支配労働量に等しいと書き記したのである。」⁹⁾つまり、スミスは労働力の商品化ということを念頭においていたから、労働を遂行することによる労働者自身の肉体ならびに精神に支払わせる *disutility* の大きさが、商品の真実の価値になるのである、というように解釈できるのである。

さらに、スミスのいう「これらの貨幣または財貨は、一定量の労働の価値を含んでおり、われわれはそのときにそれらを、これと等量の労働の価値を含むと思われる物と交換するのである」という一文は、投下労働量による価値規定として読みとるべきではない。「スミス自身はこのパラグラ

フでは、諸種の財貨はそれぞれが市場で同一量の労働を支配するものである限り、相互に交換可能だといっているにすぎない。したがって、商品が一定量の労働の価値を含むという表現は、商品の生産に投下された労働量を念頭において用いられていたのではなく、その商品が市場で購入ないし支配する労働の量を念頭においてのものにはかならない」¹⁰⁾という解釈である。この後段の分析は鋭く、判断は傾聴に値するものと思われる。

「ホッブス氏がいうように、富は力である。……その所有が、ただちに、しかも直接にかれにもたらす力は、購買力、すなわち、そのときその市場にあるいっさいの労働またはいっさいの労働生産物に対する一定の支配である。かれの財産の大小は、この力の大きさ、つまりその財産がかれに購買または支配させうる他の人々の労働の量か、またはこれと同じことであるが、他の人々の労働生産物の量かのいずれかに正確に比例する。あらゆるものの交換価値は、それがその所有者にもたらすこの力の大きさにつねに正確に等しいにちがいないのである。」¹¹⁾

このスミスの論述では、労働と労働の生産物とが整理されなくて、混同して使われていることである。生ける労働と対象化された労働を同一視することによって、労働の生産物が直接に労働を購買または支配することができると考えているようである¹²⁾。もともとスミスの市民社会分析の基本には、商品の交換関係は、つきつめていけば労働の交換関係になるという確信があった。さらには、商品所有者の富は、「その財産がかれに購買または支配させうる他の人々の労働の量」から成る、あるいは「そのときその市場にあるいっさいの労働またはいっさいの労働生産物に対する一定の支配」力から成るというばあい、商品所有者の

8) 高島善哉, 前掲書, 147ページ。

9) 羽鳥卓也, スミスの価値論と「初期未開の状態」三田学会雑誌(慶応義塾大学), 67巻10号, 1974年10月, 38~39ページ。

10) 羽鳥卓也, 前掲論文, 39ページ。

11) *Wealth of Nations*, I. v. 3, p. 48, 訳I, 106ページ。

12) 富塚良三, 蓄積論研究, 未来社, 1971年, 22ページ参照。

労働は、あらゆる他人の労働との間に交換価値を形成することが主張されているといえよう¹³⁾。

K. マルクスは、上述してきたスミスの商品価値に関する章句を次のように評言している。「ここで強調されているのは、分業によって引き起こされた変化である。その変化とは、すなわち、富はもはやその人自身の労働の生産物のうちにではなく、この生産物が支配する他人の労働の量、すなわちこの生産物が買いうる社会的労働量のうちに存するという、そしてこの量は、この生産物そのものに含まれている労働の量によって規定されている、ということである。事実上ここで言われていることは、ただ、私の労働は社会的労働としてのみ、したがって私の労働の生産物は等量の社会的労働にたいする支配としてのみ、私の富を規定するという、交換価値の概念だけである。……ここで強調されているのは、分業および交換価値によって引き起こされた私の労働と他人の労働との等置、言い換えれば社会的労働の等置であって、……けっして対象化された労働と生きている労働との区別や、その交換の特殊な諸法則ではない。」¹⁴⁾

このマルクスのスミス評価に関して、羽鳥卓也氏は注目すべき分析をおこなっている。すなわち、マルクスの指摘は、スミスが資本主義的経済関係を想定していたのではなくて、単純商品生産社会を想定していたために、商品の価値はその支配労働量に等しいという命題が、商品の価値は投下労働量によって規制されるという別の表現になってあらわれたのである、と考えてよからう。しかし、ここまでのマルクスの評価は妥当だけれども、「ホブズ氏がいうように……」以下のスミスの言説のなかに、マルクスが使用したテキストには書かれていなかった新しい文章が挿入されて

いる。「その（富の一引用者）所有が、ただちに、しかも直接にかれにもたらす力は、購買力、すなわち、そのときその市場にあるいっさいの労働またはいっさいの労働生産物に対する一定の支配である。」これである。この一文でみられるように、労働生産物は市場で他の労働生産物と交換されるばかりでなく、労働と直接に交換されることもある、とスミスは考えている。そうだとすれば、「スミスのいう商品による労働の購買ないし支配とは、……市場における商品による労働の直接的な購買ないし支配を意味しているとみななければならないまい。してみると、スミスはここでは労働力が商品化されている社会状態を念頭において議論していたとみななければならないだろう。」したがって、スミスが、労働こそが真実の価値尺度であると言明したときには、単純商品生産社会ではなく、紛れもない資本主義的経済社会が想定されていたのである、と分析している¹⁵⁾。

このようにして、スミスは、商品の交換価値の実質的な尺度として支配労働を選んでいることは確かである。しかし、また、ある商品を生産するのに要した労働の量の多寡が、その商品が購買または支配するであろう労働の量の多寡を決めることもあると、スミスはくりかえし主張している。たとえば、「ある特定量の金銀で購買または支配しうる労働の量、つまりそれと交換される他の財貨の量は、このような交換がおこなわれるときにたまたま知られている諸鉱山が、豊鉱か貧鉱かということにつねに依存する。アメリカの豊富な諸鉱山の発見は、16世紀に、ヨーロッパの金銀の価値をそれ以前の約3分の1に縮減した。それらの金属を鉱山から市場へもたらすのにはよりわずかの労働しかついやされなかったから、それらの金属がそこへもたらされたときにもまた、よりわずかの労働を購買または支配しえたにすぎない。」¹⁶⁾

13) 久留間鮫造・王野井芳郎、経済学史、岩波書店、1963年、92～93ページ、および、内田義彦、増補経済学の生誕、未来社、250ページ。

14) K. Marx, *Theorien über den Mehrwert. I*, M-E Werke, Bd. 26-1, Dietz, 1965, ss. 46～47, 訳I, 大月書店版、57ページ。

15) 羽鳥卓也、スミスの価値論と「初期未開の状態」、三田学会雑誌（慶応義塾大学）、67巻10号、1974年10月、35ページ。

16) *Wealth of Nations*, I. v. 7, pp. 49～50, 訳I, 108～109ページ。

「天然に多産的で、しかもその大部分がまったく未耕作の国では、家畜、家禽、あらゆる種類の猟の獲物などはごく少量の労働で獲得できるから、それらはごく少量の労働しか購買または支配できないであろう。それらが販売されうる貨幣価格が低いということは、そこでの銀の実質価値がひじょうに高いという証拠ではなくて、これら商品の実質価値がひじょうに低いという証拠なのである。」¹⁷⁾

「こういう事情を考察すると、なぜ粗雑な製品の实質価格と良質の製品のそれとの双方が、昔のほうが現代よりもはるかに高かったか、ということの理由がおそらくある程度までわかるであろう。その当時、市場へ財貨をもたらしには現代よりも多くの労働がついやされたわけである。それゆえ、財貨がそこへもたらされたばかりには、それはもっと多量の労働の価格とひきかえに購買され、すなわちそれと交換されたにちがいないのである。」¹⁸⁾

これらの引用文のすべてに共通していえることは、商品を生産するのに要した労働量が、その商品を支配するということである。つまり、商品の価値は、その商品を生産するのに投下された労働量によって決まるということ、換言すれば、投下労働量は、商品の価値を規制する諸要因の一つでもある、ということである。だが、既にみたように、スミスはこの考え方を商業社会の交換過程における実質的尺度とはしなかった。スミスにとっては、一国の富は労働の生産物であることを確認しておけばよく、むしろ主要な関心は、それらの中味の消費財が、分業に基づく協業社会という一つの商業社会において、どのようなルールによって交換されるのかということであった。労働の生産物が、生産過程で生まれてくることは自明のことだったのである。スミスは、生産と消費の区別を明確にしていなくても¹⁹⁾、生産過程におい

ては投下労働量が価値の源泉であると認識していたことは確かである。このことを基礎にして、流過程において、諸商品の交換の大きさを測る尺度は支配労働量であるという認識が、強くはたっていた。スミスが投下労働量に裏づけられて、支配労働量を現実の交換過程の尺度としたのは、このためである²⁰⁾。

〔 III 〕

アダム・スミスにとっては、諸財貨がどのようなルールで交換されるのか、その相対価値を究明することが当面の課題であった。だから、商品の交換価値の大きさを支配労働量に求めたのであった。同時に、それは投下労働量に裏づけられたものでもあった。だとすれば、支配労働が投下労働と量的に一致するのは、どのような社会状態なのであろうか。スミスはいう。「資財の蓄積と土地の占有との双方に先行する社会の初期未開状態のもとでは、さまざまなものを獲得するために必要な労働量のあいだの割合が、これらのものをたがいに交換するためのある規準になりうる唯一の事情であるように思われる。たとえば、もし狩猟民族のあいだで、1頭のビーヴァを殺すのに、1頭の鹿を殺すのに2倍の労働が通例ついやされるとすれば、1頭のビーヴァは、当然、2頭の鹿と交換され、つまり2頭の鹿に値いすることになるであろう。もしある種の労働が他よりもきびしいものなら、このはげしい辛苦は当然いく分かしんしゃくされるであろうし、前者の方法でなされた1時間分の労働の生産物が、後者の方法でなされた2時間のそれと交換されることもしばしばあろう。……こういう事態のもとでは、労働の全生産物は労働者に属し、またある商品の獲得または生産にふつつついやされる労働量は、その商品がふつつつ購買し、支配し、またはこれと交換されるべ

17) *Ibid.*, I. xi. e. 25, pp. 205~206, 訳 I, 342ページ。

18) *Ibid.*, I. xi. o. 13, p. 263, 訳 I, 429~430ページ。

19) 和田重司, アダム・スミスの政治経済学, ミネルヴァ書房, 1978年, 60ページ。

20) Ronald L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, London, 1973. p. 62, 邦訳69ページ参照。

き労働量を規制しうる唯一の事情である。」²¹⁾

資本の蓄積や土地の占有がない社会状態においては、労働の全生産物は労働者に属し、これこそが事物の本来の状態であることを、スミスは明快に述べている。資本や土地などの生産手段が未だ私的に所有されていない状態の下では、労働者は同時に生産者でもある。労働の生産物は、生産者である労働者にすべて帰属する。なぜならば、「かれには、ともに分けあうべき地主も親方もいない」²²⁾ からである。「ある商品の獲得または生産にふつついやすされる労働の量は、その商品がふつつう購買し、支配し、またはこれと交換されるべき労働の量を規定しうる唯一の事情」となるわけである。スミスが論じているように、1頭のビーヴァー＝2頭の鹿という等式は、1頭のビーヴァーの価値は鹿の2倍であることを示すものである。1対2という交換比率の違いは、その背後に、各々の獲物を獲得した人の間に、この比率ならば交換してもよいという心理が作用するからである。このような交換価値の決定は、1頭のビーヴァーを獲得するのに必要とした労働の量が、その商品の支配しうる労働の量を規制することを意味する。投下労働量＝支配労働量というこの状況を、スミスは「事物の本源的状态」として捉えている。こういう社会状態は、直接生産者たちが相互に商品と交換している状況を指す。それは、資本家と賃銀労働者とが対立しているような成熟した資本主義社会ではなくて、単純な商品生産＝流通社会を表現しているものといえよう。

単純商品生産＝流通社会としての「初期未開の状態」を、人間と自然との間の物質代謝の過程として捉える姿勢が、スミスにはあったのではなかろうか。この状態は、資本家と賃金労働者とに分化する以前のもので、投下労働が支配労働と量的に一致する「事物の本源的状态」としてスミス

は想定していた²³⁾。

しかし、資本の蓄積や土地の私有が進展してくる商品生産社会においては、投下労働量が商品価値を規制する唯一の事情でなくなってくる、とスミスはいう。「資財が個々人の手に蓄積されるや否や、かれらのなかのある者は、勤勉な人々を就業させるために当然それを使用し、かれらの所産を売ることによって、すなわちかれらの労働が原料の価値に付加するものによって利潤をあげるために、かれらに原料や生活資料を供給しようとする。その完成品を貨幣、労働またはその他の財貨のいずれかと交換するばあいには、こういう冒険に自分の資財をあえて投じるこの事業の企業家にも、その利潤として、原料の価値や職人の賃銀を支払うにたりるものをこえるなにものかがあたえられなければならない。それゆえ、職人たちが原料に付加する価値は、このばあい二つの部分に分解されるのであって、その一つはかれらの賃銀を支払い、他は雇主が前払いした原料と賃銀との全資財に対する利潤を支払うのである。雇主が職人たちの所産を売却することによって自分の資財を回収するにたりる以上のなにものかを予期できぬかぎり、かれはかれらを雇用するのになんの興味ももてぬはずであるし、またかれの利潤がかれの資財の大きさに対してある比例をもたぬかぎり、かれは小資財よりもむしろ大資財を使用するのになんの興味ももてぬはずである。……

こういう事態のもとでは、労働の全生産物は必ずしもつねに労働者に属さない。かれは、たいていのばあい、かれを雇用する資財の所有者とともにそれを分けあわなければならない。また、こう

21) *Wealth of Nations*, I. vi. 1～4, p. 65, 訳 I, 131 ページ。

22) *Ibid.*, I. viii. 1, p. 82, 訳 I, 157 ページ。

23) 羽鳥氏は次のようにいう、「ここでスミスが未開の状態においても社会的に平均的な労働力の存在を想定して理論展開をはかろうとしたことは、スミスが単純商品生産社会としての未開の状態を描くにあたって、かれがあらかじめ成熟した資本主義を念頭におきつつ、そこから資本・賃労働関係を捨象することによって、つまり、純粋に理論的な抽象という操作によって、単純商品生産社会を構想したのだということを示すだろう。」(同氏、前掲論文、43 ページ)。

なると、ある商品の獲得または生産者にふつうついやされる労働の量は、その商品がふつう購買し、支配し、またはこれと交換されるべき労働の量を規制しうる唯一の事情ではない。賃銀を前払いし、その労働の原料を提供した資財の利潤に対してもまた、当然追加量が支払われなければならないのは明白である。」²⁴⁾

また、土地が特定の人々に私有されると、地主が地代を要求してくることを次のように論じる。

「ある国の土地がすべて私有財産になるや否や、地主たちは、他のすべての人々と同じように、自分たちが種をまいたこともないところで収穫することを好み、その自然の生産物に対してさえ地代を要求する。森の木や、野の草や、大地のいっさいの自然の果実は、土地が共有だったときには労働者がただこれを採取する手数をかけさえすればよかったが、いまやかれにとってさえ追加的価格がついたものになる。いまやかれは、これらを採取するための許可に対して支払わなければならないし、しかもかれは自分の労働が収集または生産したものの一部を地主にひきわたさなければならない。この部分が、またこれと同じことになるが、この部分の価格が、地代を構成し、そしてそれは、大部分の商品の価格における第三の構成部分を形づくるのである。」²⁵⁾

ある商品の生産に体现される労働量は、その商品が購買し、支配し、交換されるべき労働量を規制する唯一の事情である「事物本来の状態」が、資財の蓄積や土地の占有が導入されると、そうではなくなる。資財が特定の人に蓄積され、土地が私有財産になると、労働の全生産物は、必ずしも、つねに、労働者に属さない。資本の所有者のもとに雇用された労働者が生産する全部の所産は、資本の所有者と土地の所有者との間で分けあわなければならない。

このばあい、資財の利潤は、労働の賃銀とは全

く異なる原理によって規定される。すなわち、資本の所有者がリスクをおかしてまで資財を投じて事業を営む理由は、その資財に対して生ずる利潤を手に入れるためである。利潤は、労働者が原料の価値に付加することによって生ずる。原料の価値や労働者に支払う賃銀以上のものが、利潤として、資本の所有者に与えられなければならない。こうして、労働者＝「職人」たちが原料に付加する価値は、賃銀と利潤とに分解するのである。しかも、利潤というものは、「使用される資財の価値によって全部的に規定され、この資財の大きさに比例して、大ともなり小ともなるのである。」²⁶⁾これは事実上、投下資本総額に対する剰余価値の割合を指している。この割合が確定しているばあいには、投下した資本が大きければ、当然、利潤も多い。資本の所有者がほとんど労働しなくても、自分の利潤は、投下した資本に対して規則的な比例をもつ。それゆえ、資財の利潤は、労働の賃銀とは全く異なる原理によって規定されるというのである。

地代についても、スミスは同様の説明をする。土地の私有が認められると、土地の所有者は、「自分たちが種をまいたこともないところで収穫することを好み、その自然の生産物に対してさえ地代を要求する。」土地が共有であった時代には、大地のすべての自然の果実は、労働者がただこれらを採取する手数をかけさえすればよかった。しかし、土地が私的に所有されると、労働者は、土地所有者に対して採取するための使用料を支払わなければならない。労働者が労働して収集または生産したものの一部を土地所有者にわたさなければならない。

このように考えると、労働の全生産物は、必ずしも、つねに、労働者に帰属しないといえる。たいていのばあい、かれを使用する資財（または土地）の所有者とともに分けあわなければならない。労働者が原料に付加するところの価値は、賃

24) *Wealth of Nations*, I. vi. 5~7, pp. 65~67, 訳 I, 132~134ページ。

25) *Ibid.*, I. vi. 8, p. 67, 訳 I, 134ページ。

26) *Ibid.*, I. vi. 6, p. 66. 訳 I, 133ページ。

銀と利潤と地代とに分解されざるをえない。こうなると、商品の生産に投下する労働量が、その商品が購買し、支配し、これと交換されるべき労働の量を規定する唯一の事情ではなくなる。つまり、商品を生産するのに投下した労働には賃銀が前払いされるが、労働の原料（＝労働対象）を提供した資本家の資財に対しては、それに追加して利潤が支払われる。また、土地の使用については、土地の所有に対して、追加して地代が支払わなければならないことになる。

以上のスミスの論理展開をみて、スミスが資本制社会においては投下労働価値説を放棄したと評価する諸見解が多い、例えば、マルクスは次のように論断している。「スミスは、はじめに、交換価値は労働量に帰着するという、また交換価値に含まれている価値は、原料などを控除したあとは、労働者に支払われる労働部分と労働者に支払われない労働部分とに分解し、このあとのほうの部分は利潤と地代とに……分解するという、ことを説明したのちに、にわかに主張を変える。そして、交換価値を、賃金と利潤と地代とに分解させるのではなく、むしろこれらを交換価値の形成者にし、それらが独立の交換価値として生産物の交換価値を形成するのだとして、商品の交換価値を、独立の、それにはかかわりなく規定された賃金と利潤と地代との価値によって構成する。価値がこれらのものの源泉なのではなく、それらのものが価値の源泉になるのである。……彼が内的な関連を述べたあとで、突然再び彼を支配しているのは、現象の観点であり、競争のうちに現われるとおりの事物の関連である。」²⁷⁾ 資本の蓄積と土地の占有が行われる前の段階においては、投下労働量が商品の交換価値を規制する。それが賃銀と利潤と地代とに分解する。いわゆる、分解価値説が論理展開の基本にすえられている。ところが、資本の蓄積と土地の私有とを特徴とする資本制社

会においては、投下労働説に基づいた分解価値説が姿を消し、これとは異った説明原理、すなわち、支配労働量に基づいた賃銀と利潤と地代とが商品の交換価値を形成する。いわゆる、構成価格論が商品の交換価値を規制するものとして登場してくる。そして、これをもってスミスは資本制社会の現象の説明原理としている、とマルクスはしているのである。このようなマルクスのスミス評価が基盤となって、我国においては、スミスは価値論においてみるかぎり労働価値説を放棄したとする見解が一般的になっているように思われる。

しかしながら、これらの通説に対して、われわれに再考を促す見解がある。内田義彦氏の「追加価値説」ロンルド L. ミーク氏の「同一方向説」羽鳥卓也氏の「補完説」などがそれである。

内田義彦氏は次のように説明する。「資本主義社会では、投下した労働がもはや価値を決定する唯一の事情ではないとスミスがいうのは、1 つには資本主義社会では、価値法則は価値通りの交換という形で現われず、生産費プラス平均利潤をもって商品が売られるということの中にあらわれているという事実の認識であり（構成価格論）、いま1 つは、利潤や地代の源泉を投下労働に求めようとする努力の中においてである（追加価値論）。

労働者の投下した労働だけが価値を作るということは、かれの全体系を通じる大きな骨格になっているのであって、……かれが、追加価値論をもちだして投下労働による価値決定の原理が修正をうけるというのは、資本や土地（の用益）がそのものとして商品の価値を作りあげるといっているのではない。価値を作りあげるのはあくまでも生産的労働者が投下した労働だけである。かれがいうのは、労働者の投下した労働が追加価値を作りあげ、それが利潤および地代になるというにすぎない。それならば、——労賃水準が同一で——生産力が増大すれば、追加価値は上昇するにすぎない。スミスの問題にしているところは、内容的には剰余労働の源泉であり……かれが直接に言わん

27) K. Marx, *Theorien über den Mehrwert. II*, M-E Werke, Bd. 26-2, Dietz, 1965, ss. 214~215, 訳 II, 280~281ページ。

とするのは、発展した文明社会では、労働者の必要労働をこえて剰余労働が存在し、労働者はこの剰余労働を遂行し、これが利潤、地代の源泉となっているが、まさに、この剰余労働のなかに拡大再生産のフアンドが存在しているということである。」²⁸⁾

ここでは、生産的労働者が投下した労働だけが価値をつくりあげ、それが労賃部分のほかに、利潤、地代のもとになる価値を追加してつくることが述べられている。労賃水準を一定として、労働者の生活水準の上昇が、生産力の上昇よりも低いことに、スミスはかれの追加価値の理論の基礎をおいている。したがって、生産力が上昇すれば、労働者はかれの労賃部分以上の追加価値を益々多く生産することになる。これが、利潤や地代になるわけだから、労働者はかれ自身を再生産する生活資料の価値をこえて、資本家のために剰余価値を生産する。このことを表現するために、スミスは追加価値なる言葉を用いて理論を展開している。ただ、内田氏は「投下労働による価値決定の否定は、利潤や地代を自然に“ついていける”ものと前提しながら、しかもその利潤や地代の源泉を剰余労働に求めようとする努力の中で生まれています。」と述べているけれども、「投下労働による価値決定の否定」ということを、スミスはどこにもいっていないことに注意すべきである。投下労働量が商品の交換価値を規制しうる唯一の事情ではない、というスミスの表現は、投下労働量によってあらゆる商品の交換価値を全部的に規制することはできないと理解してよいであろう。そうであるならば、スミスはあくまでも投下労働を基礎におきながら、それを保持しながら、現実の資本制的商品进行分析したといえる。ところが、投下労働量だけでは商品価値の分析ができない。なぜ

ならば、資本制的商品のばあい、その支配労働量の方がその生産に投下された労働量よりも大きいことに、スミスが気づいたからである。しかし、このことは、「投下労働による価値決定の否定」ではなく、投下労働によっては価値を全部的に決定することができないことを意味しているにすぎない。

また、価値に関して、ロンド L. ミーク氏は次のようにいう。スミスは、「価値とは、商品が社会的労働の生産物であるという事実によって、その商品にあたえられるところの属性なのだ」というのである。まさにこの意味において、そしてこの意味においてのみ、スミスは労働を価値の“源泉”または“原因”とみなしたのであった。

ところで、価値原理の本質にぞくするのは、それが性格上、量的であるべきだということであり、いいかえれば、それがわれわれに、一商品が“他の諸財貨をかう力”をもつのはなぜかを、説明しうるだけでなく、それが実際にもっているまさにそれだけのこの力を、なぜもっているのかを説明しうるものでなければならない、ということである。」²⁹⁾ この観点からすれば、商品の支配労働量はその投下労働量の増減に応じて同一の方向に変動することは確実である。このことは、しかしながら、「スミスによれば、……体化された労働を価格の“規制者”たらしめるには、十分でなかった。……もし、体化された労働の量が、厳密な意味において“交換価値”の“規制者”として認められるべきであったならば、支配労働の量が体化された労働の量とともに、同一の方向へかわることだけでなく、これら二つの労働の量が、つねに正確に等しいこともまた示されるべきであったであろう。」³⁰⁾ だが、スミスの仮定では、近代における価値の規制者は、体化された労働よりもむしろ自然価格の構成諸要素をその決定因とみなしていたように思われる、とミーク氏は解釈する。し

28) 内田義彦, スミス「国富論」体系, 内田・小林ほか編, 経済学史講座, 第1巻, 有斐閣, 昭和39年, 所収, 128ページ。なお, 同氏, 増補経済学の生誕, 未来社, 1962年, 269~270ページ及び, 経済学史講義, 未来社, 1964年, 170~180ページも同一の趣旨で展開されている。

29) Ronald L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, London, 1973, p. 62, 邦訳, 69ページ。

30) *Ibid.*, pp. 69~70, 邦訳, 79ページ。

かし、そうだからといって、スミスが労働価値論を拒否したとはいえないと次のようにいう。「多くの経済思想史家は、とくに、商品に体化された労働の量は、近代的諸条件のもとでは、もはや、それが購買または支配するであろう労働の量を規制しないという、スミスの結論に注目して、スミスは実際には労働価値論を“拒否”したのだと断定した。そのように主張するのは、労働価値論の誤解であるだけでなく、スミスの重要な貢献の過小評価である」³¹⁾と強調している。とくに、スミスは次のような事実から思考を発展させているので、スミスが労働価値論を拒否したとするのはあたらないという。すなわち、スミスは、「分業によって特徴づけられるすべての近代社会において、個人と個人はある種の市場でかれらの労働の生産物を相互に交換する独立の生産者としての資格において、互に関係づけられるのだという事実である。」³²⁾ こうして、ミーク氏は、スミスの労働価値論を評価する。とくに、投下労働と支配労働とを対立の関係としてではなく、両者を同一の方向において捉えていると理解できるのである。

かかるミーク氏の見解を高く評価する論者として羽鳥卓也氏が挙げられる。羽鳥氏は次のように論じる。「蓄積以前の状態については、商品の交換価値はもっぱら投下労働量の増減のみによって規制されるというべきであるが、しかし、蓄積以後については、交換価値は投下労働量の増減によっては“ある程度”規制されるにすぎないというのであろう。

それなら、“ある程度”規制されるとはどういうことか。おそらく、スミスは資本蓄積以後の事態においても、交換価値は投下労働量の増減と同一方向にしか変動しえないと考えつづけているのであろうと思われる。」³³⁾「スミスによれば、投下労働量の増減を知っただけでは、交換価値がいか

なる方向へ変動するかを把握しうるだけであって、交換価値がどの程度の大きさにおいて変動するかを確定しえない。これを確定するには、投下労働説は価格構成説によって補完されなければならないというのである。……スミスの価格構成説がこのようにスミス自身の論理の中でその投下労働説と対立すべきものとしてではなく、かえって、それを補完すべきものとして構想されている」のである³⁴⁾。そして、次のようにマルクスのスミス評価を戒める。「マルクスはスミス価値論のなかに、事物の内的関連を科学的に解明するための基礎理論としての投下労働量による価値規定が見出されるという点を指摘したけれども、同時に、この価値規定を全く否定する結果を招く俗流的見解の基礎もまた見出されると指摘した。しかし、マルクスが後者の点を指摘したのは、かれが主としてガルニエ訳の『国富論』に依存してスミスの学説を学ぼうとしたために、第6章のなかで1箇所だけでなく、2箇所にわたって、賃金・利潤・地代は“価値の源泉”であるという趣旨の文章を見出したためであった。」³⁵⁾

とにかく、われわれは「一つの財貨が労働の所産であること、したがって、そのことに基いて、他の財貨の中に含まれているそれと同量の労働を購入しまたは支配できるとスミスは述べた」³⁶⁾ことを確認した。資本制社会では、商品に投下された労働量とその支配労働量が一致しない、むしろ、前者よりも後者の方が大きくなる。つまり、商品の価格を分析すれば、労働者に支払われる賃金の価値を上回る価値が、つねに一定の位置を占めている。その理由は、労働者が自分の賃銀部分以外に利潤や地代となる部分を追加して生産しているからだ、とスミスは分析したのである。利潤

31) *Ibid.*, p. 79, 邦訳, 91ページ。

32) *Ibid.*, p. 80, 邦訳, 93ページ。

33) 羽鳥卓也, 古典派資本蓄積論の研究, 未来社, 1963年, 35ページ。

34) 前掲書, 37ページ。

35) 羽鳥卓也, スミスにおける「価値の源泉」, 三田学会雑誌 (慶応義塾大学), 67巻6号, 1974年6月, 34ページ。

36) 高島善哉, アダム・スミスの市民社会体系, 岩波書店, 昭和49年, 147ページ。

の源泉を、労働者が生産するこの追加価値に求めたのである。労働者が原料につけ加える価値が、賃銀や利潤や地代の源泉になるというスミスの認識は、剰余価値の真の源泉がなんであるかを素朴ではあるが、理解していたことを物語っているといえよう。

このことは、かれの賃銀論においてより明確に述べられている。スミスはいう。「労働の生産物は、労働の自然的報酬つまり自然的賃銀を構成する。」「土地が私有財産になるや否や、地主は、労働者がその土地から産出したり収集したりしうるほとんどいっさいの生産物について分けまえを要求する。かれの地代は、土地に使用される労働の生産物からの第一の控除をなすのである。」「すべての技術や製造業において、大部分の職人は、かれらの仕事のための原料と、それが完成されるまでのあいだの賃銀と生活維持費とを前払いしてくれる親方を必要とする。かれはかれらの労働の生産物の分けまえ、すなわちその労働がついやされることによって原料に付加される価値の分けまえにあずかるのであって、この分けまえこそがかれの利潤なのである。」そして、かれの利潤は、労働の生産物からの第二の控除をなすのである³⁷⁾。みられるように、地代や利潤が、労働生産物の控除部分として把握されている。

利潤や地代の発生が、労働者の生活維持費にあてられる賃銀を超えて、剰余労働として捉えられていることは、たしかである。したがって、スミスは、利潤を剰余労働の対象化されたものとして理解しているといえる。労働者の賃銀を支払うだけの労働量を超えて、労働者が原料につけ加える労働部分から利潤は成り立つ。この意味において、利潤は、労働者の労働の不払部分たる剰余労働からのみ成り立つといえる。

スミスは、事実上、剰余労働が剰余価値をつくることを把握している。しかし、このばあい、剰余価値を直接に利潤の形態で捉えているのであ

る。「職人たちが原料に付加する価値は、このばあい二つの部分に分解されるのであって、その一つはかれらの賃銀を支払い、他は雇主が前払いした原料と賃銀との全資財に対する利潤を支払うのである。」³⁸⁾ スミスは、商品の交換価値を評価するばあいに、抽象的な観念である労働の量というよりも、具体的な特定の商品の量というほうが理解しやすく、自然である、と考えていた。また、日常生活において、購買や販売を決定するのは価格との関連においてである、という現実感覚に基づいていた。このような観点を重視するならば、労働者は自分の労働力を再生産する価値部分と剰余価値部分を生産するという考えは、余りに抽象的でなじみのない表現方法であったかもしれない。だから、上記引用文のような表現をしたのであろう。しかしながら、この文章は、利潤を剰余価値の転化した形態としてでなく、直接に利潤として把握している。さらに、つづけていうスミスの言葉に注目しよう。「雇主が職人たちの所産を売却することによって、自分の資財を回収するにたりる以上のなにものかを予期できぬかぎり、かれはかれらを雇用するのになんの興味ももてぬはずであるし、またかれの利潤がかれの資財の大きさに対してある比例をもたぬかぎり、かれは小資財よりもむしろ大資財を使用するのになんの興味ももてぬはずである。」³⁹⁾ 最初、スミスは、事実上の剰余価値を労働者が原料につけ加える賃銀を超える部分から導き出していた。ところが、この文章によると、この超過分を利潤として捉えているのである。前貸資本の総価値を超える超過分として、である。これは、雇主が前貸した原料と賃銀の全額との関連において、利潤を理解していることになる。ただ前貸資本の総額のなかに生産手段部分が落ちているのは、スミスの片手落ちであるが、眼前に展開している資本主義的生産をこのように分析したことはスミスの現実感覚の優れたところでもある。資本家が前貸資本の大きさに対して、

37) *Wealth of Nations*, I. viii. 1~7, pp. 82~83, 訳 I, 157~159ページから抜粋。

38) *Ibid.*, I. vi. 5, p. 66, 訳 I, 132ページ。

39) *Ibid.*

一定の利潤を予測できるのでなければ資本を投下しないということは、とくにここで強調すべき点である。

このように利潤を剰余価値の発展した形態から説明せず、投下資本との関係から説明したスミスは、利潤が監督労働に対する賃銀ではないことを次のように説明する。「資財の利潤というものは、特定部類の労働、つまり監督し指揮する労働の賃銀に対する別名にすぎない、と考えるかも知れない。けれども、利潤は、労働の賃銀とはまったく異なるものであり、それとは全然異なる諸原理によって規制されているのであって、監督し指揮するというこの想像上の労働の量や、辛苦または創意とはなんの比例をもたぬものである。利潤は、使用される資財の価値によって全面的に規制され、この資財の大きさに比例して大ともなり小ともなる。

たとえば、ある特定の地方における製造業の資財のふつうの年々の利潤が1割とし、そこに二つの異なる製造業があって、そのおのおのに20人の職人が各年額15ポンドの率で雇用されている。つまり、おのおのの製造場では年額300ポンドだけ経費がかかるとしよう。さらに、前者の製造場で年々に仕上げられる粗悪な原料はわずか700ポンドしかかからぬのに、後者の製造業でそうされる良質の原料は7,000ポンドもかかる、と仮定しておこう。このばあい、年々使用される資本は、前者ではわずか1,000ポンドにしかならぬのに、後者で使用されるそれは7,300ポンドになるであろう。それゆえ、1割という率では、前者の企業家はわずか約100ポンドの年利潤しか期待しないのに、後者の企業家は約730ポンドを期待するであろう。ところが、たとえかれらの利潤はこれほど大差があるにしても、監督し指揮するというかれらの労働は、いずれもまったく同一またはほとんどまったく同一であろう。」⁴⁰⁾ 利潤は、監督労働に対する賃金ではない、というスミスの説明のな

かに、われわれはスミスが利潤を一体どのように捉えていたのか興味をもつのである。しかし、スミスの説明には、一定の利潤率が所与のものとして登場してくるだけであって、利潤に対する明確な本質規定はみあたらない。うへの例でいえば、10%の利潤率が与件とされており、労働者数したがって労働部分にあてられる資本が一定であれば、流動資本を多く充当した企業の方が投下資本総額が大きいから、当然、多くの利潤を手に入れることができる、と説明されているにすぎない。つまり一定の利潤率を所与のものとして自明の前提とし、使用資本の大小が利潤の大小を規定するとしているのである。利潤の本質に関する分析よりも、利潤量の大小という量的規定にスミスは傾斜している。資本が特定の人に蓄積されているような資本制社会というものは、利潤の獲得を中心に生産活動がおこなわれるのが自然である、というのがスミスの考え方なのであろう。資本の所有者が労働者を雇うのは、利潤を手に入れるためである。そのために、資本家が労働者に原料を供給する。そうすれば、労働者がその原料に新しく価値をつけくわえるから、そこから利潤がうまれる。スミスにとっては、これらの関連を原初的に確認すればよかった。スミスは、「本書のような著作では、さまざまなときとところで、特定の商品のさまざまな実質価値を比較すること、すなわち、さまざまなばあいに、特定の商品がそれを所有していた人にあたえたであろう他の人々の労働に対する支配力のさまざまな程度を比較することは、ときには有益であろう」⁴¹⁾としたうえで、しかし、実際の日常生活のほとんどすべての業務は価格によって規制されているので、この問題に注意をむけたのであった。とすれば、スミスは利潤がうまれてくる過程を原初的に把握したうえで、現実の商品売買を支配している価格の分析に急いで入ったといえよう。

(1981.11)

40) *Ibid.*, I. vi. 6, p. 66, 訳 I, 132~133ページ。

41) *Ibid.*, I. v. 22, p. 55, 訳 I, 117ページ。